


実践年度・タイトル		平成(28)年度 見てわかる！触って楽しい！日常的なICT活用へ
授業について	教科名等 (該当する教科名等を選択。当てはまらない場合はその他を選択し、次の単元・題材名の欄に記入。)	<input type="checkbox"/> 国語 <input type="checkbox"/> 社会 <input type="checkbox"/> 算数/数学 <input type="checkbox"/> 理科 <input type="checkbox"/> 生活 <input type="checkbox"/> 音楽 <input type="checkbox"/> 図画工作/美術 <input type="checkbox"/> 家庭/技術・家庭 <input type="checkbox"/> 体育/保健体育 <input type="checkbox"/> 道徳 <input type="checkbox"/> 外国語/外国語活動 <input type="checkbox"/> 総合的な学習の時間 <input type="checkbox"/> 特別活動 <input type="checkbox"/> 自立活動 ■各教科等を合わせた指導 <input type="checkbox"/> その他の教科 <input type="checkbox"/> その他()
	単元・題材名	3人でやってみよう
	授業の目標	・順序を理解して、進んで問題に取り組むことができる。 ・自分の声の大きさや発音に気づき、改善しようとするができる。
	観点別学習状況の評価の観点 (教科の特性により設定した観点がある場合は「その他」を選択し記載。)	■「知識・理解」 ■「技能」 ■「思考・判断・表現」 ■「関心・意欲・態度」 <input type="checkbox"/> その他()
学習集団と子どもの実態	学校・学部・学年・人数	■特別支援学校 <input type="checkbox"/> 就学前 ■小学生 <input type="checkbox"/> 中学生 <input type="checkbox"/> 高校生以降 <input type="checkbox"/> 特定されない (3)年(3)人
	対象の障害	<input type="checkbox"/> 視覚障害 <input type="checkbox"/> 聴覚障害 ■知的障害 <input type="checkbox"/> 肢体不自由 <input type="checkbox"/> 病弱・身体虚弱 <input type="checkbox"/> 言語障害 <input type="checkbox"/> 自閉症 <input type="checkbox"/> 情緒障害 <input type="checkbox"/> LD(学習障害) ■ADHD(注意欠陥/多動性障害) <input type="checkbox"/> その他
	子どもの課題 (特性・ニーズ)	・発音が不明瞭である。 ・平仮名や片仮名の単語をまとまりとして捉え、読むことが難しい。 ・数の概念理解に関して、3名の実態差が大きい。 ・順番を待ったり、友達に合わせて行動したりすることが難しい。 ・間違いを指摘されて行動を修正することが苦手。
ICT活用について	使用した支援機器・教材の名称と画像 (使用した支援機器・教材の名称を記載し画像を挿入。なお、特定の製品に特化した実践の場合は製品名を記載。)	 ・iPad Pro 12.9インチ(Apple) ・デジタルTV
	活用のねらい	Aコミュニケーション支援(■A1意思伝達支援 <input type="checkbox"/> A2遠隔コミュニケーション支援) B活動支援(<input type="checkbox"/> B1情報入手支援 ■B2機器操作支援 <input type="checkbox"/> B3時間支援) C学習支援(■C1教科学習支援 ■C2認知発達支援 ■C3社会生活支援) ①見てわかる 教師が伝えたい情報をタブレットやデジタルTVに焦点化して、児童にわかりやすく伝えることができる。 ②触って楽しい 手先が器用でない児童にとっては、A4サイズのタブレットは学習を効果的にできるツールである。また、タブレットを活用して主体的に自己評価をしたり、児童同士が関わり合ったりすることができることをねらった。
授業に授業展開支援	授業展開と画像 (授業の様子、ICT活用場面の画像を挿入。)	別紙①に記載
効果・評価	子どもの様子や変容および授業の評価	「ローテーションフラッシュカード」の実践では、問題と順序を視覚化したことで、自分の順序で確実に答えることができるようになった。また、友達がつまずいているときに、その友達に声をかけたり答えを教えてあげたりする様子も見られた。 「絵本を作ろう」では、間違いを指摘されるのが嫌な児童が、自分の音声を確認し、何度も録り直し、自ら改善しようとする様子が見られた。また、友達がつまずいているときには「こうやるんだ」と手本を見せ合ったり、友達に「○」の評価をもらっても、さらに改善しようと努力したりする児童の姿もみられた。 教師—教材—児童の個別学習ではなく、児童—教材—児童の学習スタイルになったことで、児童の主体性がより発揮され、個人の「できた」想いを集団で共有することができた実践となった。